― 熊本地震ボランティア ―

足湯で癒す被災者の心

木村亘佑（法学部２年）

被災した故郷、熊本

私は大学進学までの18年間を熊本県熊本市で過ごしてきた。

「熊本で震度７」。

このたった６文字がテレビ画面に表示された時、一気に胸が高鳴った。すぐに携帯電話を手に取り家族に連絡する。しかし呼び出し音はそう長くは続かず、すぐに自動音声に切り替わってしまった。

「ただいま電波が大変混み合っております…」

そこにＳＮＳで熊本の友達からリアルタイムの情報が送られてきた。震源地の益城町に住む友人からは、彼の友人が建物の下敷きになった。また別の友人からは実家が住めない状態になった。発生から１時間が経過して、ようやく家族の無事が確認できた。

翌週に熊本に向かうことを決めた。何ができるかは言えなかったが、とにかく自分の目で被災地となった地元を見ておきたかった。

落ち着かない１日を終えた就寝前、熊本の友達から再び連絡が入った。

「また、すごく揺れた」

最初は余震だと思ったが、それが“本震”だった。

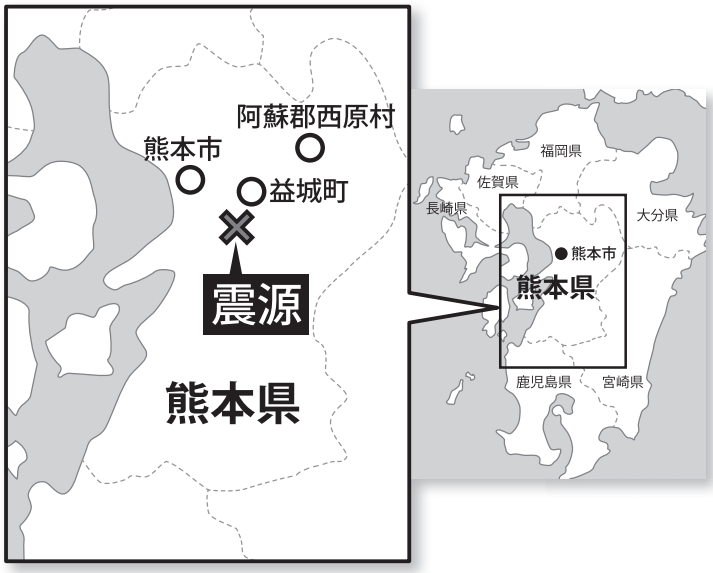
今回の熊本地震は前震と本震の２つに大別される。どちらも震度７、震源地は益城町だ。前震は４月14日午後９時46分、本震はほぼ１日経った16日午前１時25分に発生した。

死者49人、行方不明者１人、エコノミークラス症候群などの震災関連死で19人（５月10日現在）が亡くなられた。建物損壊は８万3000棟を超え、各地で仮設住宅の建設が進められているが当初の計画よりも多くの被災者の方々が入居を希望しており、現地では未だに約１万人の方々が避難所生活を余儀なくされている。

また交通インフラや農林水産業の経済的な損失は５千億円を超えると予想される。

東北に背中を押されて

地震後、すぐに電話をくれた人がいる。１年生のころから中央大学被災地支援学生団体「はまらいんや」として通っている宮城県気仙沼市の方たちだ。夏・冬・春と年３回ほどし



足湯が表情を和ませる。手前は「チーム熊本」の隈部さん、右が木村さん

か行けないが、現地で温かく迎えてくれ、孫のように可愛がってくれる。

「私らのことはいいから。今は熊本のことだけ考えて」と仰ってくれた。

そんな言葉にも押されて発生から１週間後、熊本にいた。通り慣れた道も、住み慣れた家も、全てがその様相を変えていた。そこにあったはずのものがなくなり、形を変えてしまっていることは衝撃だった。

再会した友人は「最初に地鳴りがしてすぐに下から突き上げられ、身動きを取ることもできんかった。緊急地震速報も揺れた１分ぐらい後に鳴った」と話した。

最初の衝撃で家具は東西方向に全て倒れ、本震のときは「地面が波打っているのが見えた」という。

コンクリートは常識では理解できないほどにウェーブしていた。現地へ行ってもやはり自分に何ができるか、はっきりとは言えなかったが、一刻でも早く何かをしたいということだけを考えていた。

チーム熊本を結成

大学に戻ってからボランティアセンターに相談し、中央大学の学生で「チーム熊本」を結成することになった。

５月21・22日、仲間と３人で熊本県阿蘇郡西原村に向かった。現地では小学校などに開設された避難所で「足湯」を行った。

「足湯」は、阪神淡路大震災のころから被災者の心を癒す活動として行われている。ぬるま湯をはった桶に足を入れてもらう。同時にそっと手をもみ、ほぐしたり、肩に触れてお話を伺う。

この活動で最も重要なことは被災者の方々の発された言葉―“つぶやき”―を聴き、その気持ちに寄り添うことだ。

「（倒壊されたお宅の話になって）夫が退職金で建てた家で、まだ20年しか住んでなかったのに…」

１対１で向き合って、手をもみほぐし、雑談を始めると、目の前にいらっしゃる被災された方々が、ふと心の内を言葉になさることがある。このような話を前に、私には何ができるだろうか。

簡単に「大変ですね」という言葉で片付けることもできないし、被災した家を取り戻すこともできない。

うなずいて、じっと話を聴いて、気持ちに寄り添おうと努めることが、その瞬間に自分ができる最善のことだと思っている。

２日間で「チーム熊本」が触れ合

えた方は20人ほどになった。足湯が終わるころには、みなさんが朗らかな笑顔を見せてくれた。

自分にできることを

発生から既に１カ月以上が経ち、メディアで熊本地震に関する情報が流れることは東日本大震災の同時期に比べれば随分と少なくなってきた（何気ないバラエティー番組で気持ちが少し落ち着いたという声も耳にしているが）。

メディアの情報が減ったことと比例して、現地での問題が片付いているわけではない。例えば、避難所での生活を終えて仮設住宅に入居すること。住み慣れた町に明かりが戻り、町としての外形的な形が戻ってくること。そうした形に表せるものだけが失ったものではない。

思い出や地域コミュニティ、社会的な立場や誇りと尊厳、以前の暮らしやその人を取り巻いていた環境はすぐには戻らない。あるいはもう戻ることがないものあるだろう。“復興”という言葉を考えたときに、万人に当てはまる明確な基準はない。

20年前、阪神淡路大震災を経験した神戸でも未だに当時の震災に関連した問題が存在している。

古くからその土地にあるコミュニティ特性をないがしろにして建設された公営住宅に、入居せざるをえなかった人たちが、行き場を失って引きこもりや孤独死した事例が数多く聞かれる。

東日本大震災から５年が経過した東北地方では、今年度末、公営住宅の８割が完成予定だ。仮設住宅に住まわれていた多くの方々がこれから一生を過ごす場所に移ることになるが、その過程で新たな問題が発生することは想像するに難くない。

「悲嘆のプロセス」と言って、時間が経ち心の整理がつくにつれて、発現する感情が被災者の方々の心の内にはあるという。

当たり前の日々が失われた被災地において、誰が被災者の方々に復興を遂げたと告げるのだろうか。

それは外部にいる私たちの役割ではない。被災された方々一人ひとりが自分の気持ちと向き合いながら、自分の周りを見回しながら決めていくのだろう。

だから私にできるのは少しでも自分で考え想像しながら、被災された方々と向き合ったときに何ができるのか、どういう態度でいることができるのかを、しっかりと見つめながら１回１回の出会いと活動を大切にして次の活動につなげることだけだ。

“寄り添い”という言葉は簡単なようで、すごく複雑で難しい意味合いを持ち合わせている。

私は私なりにできることをできる限り、同じ気持ちを持った中大生と協力しながら取り組みたい。

益城町ではアスファルトが波打っていた

被害状況に驚がくする中大ボランティア「チーム熊本」